

『文選集注』江淹「雜體詩」訳注（七）

許徵君（自序） 詢

荒川 悠

- 01 張子闇内機 張子は内機を闇くし
- 02 单生蔽外像 单生は外像を蔽う
- 03 一時排冥筌 一時に冥筌を排す
- 04 泠然空中賞 泠然たる空中に賞あり
- 05 遣此弱喪情 此の弱喪の情を遣りて
- 06 資神任独往 神を資いて独往に任せん
- 07 採葉白雲隈 葉を白雲の隈に採りて
- 08 聊以肆所養 聊か以て養う所を肆にせん
- 09 丹葩耀芳蕤 丹葩は芳蕤を耀かす
- 10 緑竹蔭閑敞 緑竹は閑敞を蔭うがごとく
- 11 茗茗寄意勝 茗茗として意を寄せて勝り
- 12 不覺凌虚上 覺えずして虚を凌ぎて上る
- 13 曲櫺激鮮颯 曲櫺に鮮颯激しく
- 14 石室有幽響 石室に幽響有り

- 15 去矣從所欲 去りし 欲する所に従いて
- 16 得失非外獎 得失は外獎に非ず
- 17 至哉操斤客 至れるかな 斤を操る客の
- 18 重明固已朗 重明にして固に已に朗らかなるは
- 19 五難既灑落 五難 既に灑ぎ落つれば
- 20 超迹絶塵網 迹を超えて塵網を絶つ

〔押韻〕

○像・賞・往・養・敝・上・響・獎・朗・網（上声第三十六養韻）

（『校正宋本広韻』芸文印書館 一九六七年に拠る）

〔校勘〕

- 02 单生蔽外像 「单生蔽外象」〈陳八郎本・明州本・秀州本〉
- 07 採葉白雲隈 「采葉白雲隈」〈陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〉
- 09 丹葩耀芳蕤 「丹葩耀芳蕤」〈尤刻本・胡刻本・国子監本〉
- 「丹葩耀芳蕤」〈陳八郎本・明州本・秀州本

・建州本

10 緑竹蔭閑敞 「緑竹陰閑敞」(陳八郎本・明州本・建州本)

12 不覺凌虛上 「不覺陵虛上」(尤刻本・胡刻本・国子監本

・陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)

20 超迹絶塵綱 「超迹絶塵綱」(明州本)

「訳」

張毅は内面を疎かにして、単豹は外面を疎かにして、二人とも命を落としてしまった。彼らのような世俗の中で偏った考えに囚われないで、すぐにしがらみや俗世から脱しよう。是非に囚われないさわやかな空中にこそ趣があるのだ。この若くして故郷に帰ろうとしない弱喪の心にまかせて、心を養い自然の変化に任せていこう。仙人になるための薬を白雲の湾曲から採って、しばらく自由気ままにふるまおう。朱草は赤く輝き、大きく青々と育った竹は明るい空を覆い尽くす。そのような高く育った竹のように、脱俗の思いが空に近づいて世俗に打ち勝ち、知らないうちに天空を凌ぐ気持ちである。飾り格子のかかる窓に清らかな風が当たり、石室の遠く奥深いところから仙人の声が聞こえ

る。仙人となるために自分の心に従って進んだため、すでに世俗のことは忘れてしまった。得や失といったものは世俗の外にはない。甚だしいものだ、あの「斧を操る人」の故事にみられる心をより合わせた二人の心の清く澄み切った様子は。その二人の心の澄明のごとく、心にまとう五難が既に綺麗に洗い流されたならば、世俗を超えてしがらみを絶つことができる。

【許徵君(自序)詢】

李善<sup>①</sup>曰、晋中興書曰、高陽許詢字玄度。寓居会稽。司徒蔡謨辟不起。詢有才藻善属文。于時人士皆欽愛之。

鈔曰、徵為司徒掾不就。故号徵君。好神仙遊、樂隱遁之事。故自序本壞<sup>(マヤ)</sup>所好之事在集。文通今擬之。祖式濮陽太守。父助<sup>②</sup>山陰令。隱録云、詢掇<sup>③</sup>角奇秀。衆謂神童。隱在会稽幽究山、与謝安支遁遊。遊処以弋釣嘯詠為事。雜説云、詢性好山水而涉是遊。時人謂、許掾非止有勝情、亦有濟世之具。檀氏論文章曰、自王褒楊雄諸賢尚賦頌。皆体則詩騷、

傍綜百家之言。及至建安而詩章大備。逮至西朝之末、潘陸之徒、雖復時有質文、而宗婦一也。正始中、王弼何晏尚老莊玄勝之談、世遂貴焉。至江左、李充<sup>㊦</sup>尤威。故郭璞五言詩、始会合道家之言而韻之。爰及孫興公、轉相祖尚。又加以积氏三世之辞、而詩騷之体尽矣。至義熙、謝混改焉。詢辟司徒掾不就。嘗一出都迎姊、簡文皇帝說其情理、每造膝清談、必以夜計日者也。

李善曰く、晋中興書に曰く、高陽の許詢、字は玄度。会稽に寓居す。司徒蔡謨<sup>さいば</sup>に辟さるるも起たず。詢は才藻有りて善く文を属<sup>つ</sup>る。時に于いて人士皆之を欽愛すと、と。

鈔に曰く、徴せられて司徒掾<sup>しとえん</sup>と為るも就かず。故に徴君と号す。神仙の遊びを好み、隱遁の事を樂しむ。故り自ら本懐の好む所の事は在<sup>こ</sup>の集に序ぶ。文通今之に擬<sup>なぞ</sup>う。祖式は濮陽<sup>ぼくよう</sup>の太守なり。父帰は山陰の令なり。陰録に云わく、詢は総角にして奇秀なり。衆は神童と謂う。隠れて会稽の幽究山に在り、謝安・支遁と遊ぶ。遊ぶ処は弋釣・嘯詠を以て事と為す、と。雑説に云う、詢は性山水を好みて涉りて是に遊ぶ、と。時人謂う、許掾は止だ勝情有るに非ずし

て、亦た濟世の具有り、と。檀氏文章を論じて曰く、王褒・楊雄の諸賢より賦頌を尚<sup>たう</sup>ぶ。皆体は詩騷に則り、百家の言を傍綜す。建安に至るに及びて詩章大いに備わる。西朝の末に至るに逮び、潘・陸の徒、復た時に質文有りと雖も、宗婦するは一なり。正始中、王弼・何晏は老莊の玄勝の談を尚<sup>たう</sup>び、世も遂に焉<sup>こゝ</sup>を尊ぶ。江左に至り、李充尤も威あり。故り郭璞の五言詩は、始めて道家の言に会合し之に韻す。爰に孫興公は轉た相祖として尚ぶに及ぶ。又た加うるに积氏三世の辞を以てして詩騷の体尽く。義熙に至り、謝混焉を改む。詢は司徒掾に辟さるるも就かず。嘗て一たび都に出でて姊を迎うれば、簡文皇帝其の情理を説き、毎に造膝して清談し、必ず夜を以て日を計る者なりと、と。

〔校勘〕

○李善曰 〔善曰〕 晋中興書 〔尤刻本・胡刻本・国子監本〕

○于時人 〔善曰〕 〔明州本・秀州本・建州本〕

○秀州本・建州本 〔時人〕 〔尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本〕

○時人皆欽愛之 〔時人皆欽愛之〕 〔尤刻本・胡刻本〕

○向日序謂述隱居之意也 この一文があるもの（陳八郎本）

○向日序謂述隱居之意 この一文があるもの（明州本・秀

州本・建州本）

〔訳〕

李善はいう、『晋中興書』にいう、『高陽の許詢は字を玄度といい、会稽に身を置いていた。司徒の蔡謨に召されるも役職に就こうとしなかった。許詢は文才に長けており巧みに文章を書いた。当時の人々はその許詢の文章を愛した』と。

『文選鈔』にいう、「許詢は徵挙されて司徒掾の役職を与えられるも就任しなかった。そのため徵君とよばれた。許詢は神仙の遊びを好み、隱遁の行為を楽しんだ。確かに許詢は自身の好みをこの別集の中で詠じている。江淹は今それに倣って詩作をしたのだ。祖父の式は濮陽の太守である。父の帰は山陰令である。『陰録』にいう、『許詢は幼い頃から才能に秀でており、人々は許詢を神童と称した。隱遁して会稽の幽究山の中に身を置き、謝安や支遁と、狩りや談笑をして遊んだ』と。『雑説』にいう、『許詢は生まれなが

らにして山水を好み、それで山水を巡り遊んだ』と。当時の人はいう、『許詢は山水の風景に造詣が深かっただけでなく、人々を救う素養があった』と。檀氏（『統晋陽秋』）は文章を論じて次のようにいう、『王褒・楊雄ら諸賢者より賦や頌をたつとぶようになった。詩体は『詩経』や『楚辞』にのつとり、諸子百家の發言を統括した。建安に至ってから詩文の多くが整った。西晋の末期にいたる頃、潘岳・陸機といった人物の詩は時に素朴であったり、華美であったりしたが、作詩の際に手本として仰ぎ、よりどころにしたのは皆同じであった。正始の時に、王弼と何晏は老莊の玄談を好み、世の中もとうとう老莊思想を尊ぶようになった。晋が江南へ移ってからは李充が最も威嚴を持った。まず郭璞が五言詩で老莊の道を詩に合わせて詠ずるようになった。この時から孫綽は老莊的な詩文を手本として次第に尊ぶようになった。さらに詩に仏家の要素が加わったために、『詩経』と『楚辞』の詩体は途絶えてしまった。義熙に至って、謝混がふたたび崩れた系統を改めた。許詢は司徒掾に召されるも、そこには就かなかつた。かつてひとたび姉を迎えに都へ訪れれば、簡文帝は許詢に対して自分の

考えを説き、いつも膝を向かい合わせ対面して清談を行い、必ず日をまたいだ』と」と。

〔注〕

① 晋中興書 『隋書』経籍志に「晋中興書七十八卷、起東晋。宋湘東太守何法盛撰。」とある。

② 許詢 『世説新語』の劉孝標の注に「許詢字玄度。高陽人。魏中領軍允玄孫。総角秀惠、衆称神童。長而風情簡素。司徒掾辟不就、蚤卒（許詢字は玄度。高陽の人。魏中領軍允の玄孫。総角にして秀惠、衆神童と称す。長じて風情は簡素なり。司徒掾に辟さるるも就かずして、蚤に卒す）」と記されている。

③ 父助 余嘉錫は『世説新語箋疏』言語篇において許詢の父の名について考察している。「惟其父之名乃有𦵏、助、婦、販四字之不同。考元和姓纂六、古今姓氏書弁証二十三、上声八語、均作「式子販」。即婦字。与建康実録合。其作𦵏、作助、作販者、皆以形近致誤也（惟だ其の父の名は乃ち𦵏、助、婦、販の四字の同じからざる有り。考元和姓纂六、古今姓氏書弁証二十三、上声八語は均しく「式の子販」に作る。即ち

婦の字なり。建康実録と合す。其れ𦵏に作り、助に作り、販に作るは、皆形の近きを以て誤りを致すなり）」と述べ、許詢の父の名は婦が正しいとする。

④ 捻角 「捻」は「総」の俗字。「総角」は髪を頭の両側に纏めた髪型であり、そこから元服する前の子供を意味する。

⑤ 檀氏 『続晋陽秋』の編者である檀道鸞をさす。『隋書』経籍志に「続晋陽秋二十卷、宋永嘉太守檀道鸞撰」と記されている。

⑥ 李充尤威 『世説新語』文学篇の劉孝標注に引く『続晋陽秋』にほぼ同様の文章が見える。ここでは当該箇所を「仏充尤盛（仏充尤も盛んなり）」としている。なお王応麟『困学紀聞』「考史」に『続晋陽秋』の当該箇所が引かれており、翁元圻の注に「何云仏充尤盛。当為元理（何ぞ仏充尤盛と云うか。当に元理と為すべし）」とある。

## 01 02 【張子闇内機 単生蔽外像】

李善曰、言所行雖殊、而傷生一也。莊子、田開謂周威公曰、魯有单豹者。巖居而水飲、行年七十而猶嬰兒之色。不幸遇餓虎。殺之食之。有張毅者。高門懸薄⑤无不走也。行年卅而有内熱之病以死。豹養其内而虎食其外。毅養其外病攻其内。

鈔曰、専求外不明内。故云暗内機也。蔽、塞也。蔽（見せぬ）塞也。音決、单、音善。

張銑曰、象、法也。張毅行年卅而患内熱病死、是闇内理之機微。单豹行年七十而有童兒之色。遭餓武所食、是不明外理之法。此皆偏而不広也。

李善曰く、言うところは行う所は殊なると雖も、生を傷つくるは一なり。莊子に、田開 周威公に謂いて曰く、魯に单豹なる者有り。巖居して水飲すれば、行年七十にして猶お嬰兒の色のごとし。不幸にして餓虎と遇い、之に殺され之に食わる。張毅なる者有り。高門・懸薄にして走らざるは無きなり。行年卅にして内熱の病有りて以て死せり。豹は其の内を養いて虎に其の外を食わる。毅は其の外を養いて病に其の内を攻まると、と。

鈔に曰く、専ら外を求むるも内を明らかにせず。故に内機を暗くすと云うなり。蔽は、塞おさうなり、と。

音決に、单、音は善、と。

張銑曰く、象は、法なり。張毅の行年卅にして内に熱病を患いて死するは、是れ内理の機微を暗くすればなり。单豹は行年七十にして童兒の色有り。餓武に遭い食らう所となるは、是れ外理の法を明らかにせざればなり。此れ皆偏りて広ならざるなり、と。

「校勘」

○善本作像字 上の一文あり（明州本・秀州本）

○五臣作象 上の一文あり（建州本）

○李善曰 「善曰」（明州本・秀州本・建州本）

○言所行雖殊、而傷生一也（建州本）はこの文を欠く

○張毅单豹並已見幽通賦 李善注が上の一文で終わるもの

（尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本）

○善曰張毅单豹並已見幽通賦 李善注が上の一文で終わるもの

（明州本・秀州本）

○殺之食之 「殺而食之」（建州本）

○**冊**（李善注）「四十」（建州本）

○**无不走也** 「無不趣義也」（建州本）

○**張銑曰** 「向日」（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

○**行年冊而患内熱病死** （建州本）はこの文を欠く

○**冊**（張銑注）「三十」（陳八郎本・明州本・秀州本）

「四十」（建州本）

○**内理** 「内治」（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

○**機微** 「幾微」（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

○**行年七十而有童兒之色**。**遭餓武所食** （建州本）はこの

文を欠く

○**餓武** 「餓虎」（陳八郎本・明州本・秀州本）

○**外理** 「外治」（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

○**不広也** 「不広」（陳八郎本・明州本・秀州本・建州本）

〔訳〕

李善はいう、「張毅と単豹の行動は異なるが、二人とも命を落としてしまった点では一緒である。『莊子』達生篇に、田開之が周の威公にいう、『魯の国に単豹という人がいた。山の岩穴に隠居して、水を飲んで生活をしていたため、七

十歳になっても幼児のような肌のつやであった。しかし不幸にも飢えた虎に出くわしてしまい、単豹は殺され食われてしまった。張毅という人がいた。豪華に構えている家、簾を垂らしているような小さな家でも関係なく、どこへでも走って訪ね回った。だが張毅は四十歳の頃に熱病を患い、死んでしまった。単豹は内面を保ってきたが外面を疎かにしてしまったために虎に食われてしまった。張毅は外面を保ち続けていたが、内面を疎かにしてしまったために病気に冒されてしまった」と。

『文選鈔』にいう、「張毅はただ外面を追求していて、自身の内面を明らかにしなかった。そのためこの詩では内機を暗くすと詠じているのだ。蔽は、おおい隠すの意味である」と。

『文選音決』にいう、「単、音は善」と。

張銑はいう、「象は、法則である。張毅が四十歳にして熱を患って死んでしまったのは内面にある予兆を疎かにしてしまったためである。単豹が七十歳にして幼児のような肌つやであったにもかかわらず餓えた虎に食われてしまったのは、外面に対する意識を疎かにしてしまったためである。

これら二人は偏った考え方で、広い視野での意識をしていなかった」と。

〔注〕

① 田開 『莊子』達生篇にその名が見られる。その中では「田開之」と書かれている。

② 周威公 『漢書』卷二十古今人表に「周威公桓公子」と記されている。『史記』周本紀には「桓公卒、子威公代立（桓公卒して、子の威公代立す）」という一文が記されている。

③ 高門 大きな家、富貴な家のこと。王先謙『莊子集解』の当該箇所注に「宣云、高門大家（宣云わく、高門は大家なりと）」とある。

④ 懸薄 簾を垂らすこと。転じて小さな家。王先謙『莊子集解』の当該箇所注に「宣云、懸簾薄以蔽門、小家也（宣云わく、簾の薄なるを懸けて以て門を蔽うは、小さな家なり、と）」とある。

⑤ 単、音善 『広韻』では「単」は上声第二八獮韻せんに属す。

⑥ 餓武 餓虎。「虎」の字は唐の太祖李淵の祖父である李虎の諱ゆえに避忌された。

03 04 【一時排冥筌 泠然空中賞】

李善曰、筌、捕魚之器。言魚之在筌、相あひあひ人之処塵俗。今既排而去之、超在埃塵之外。故泠然涉空、得中而留賞也。莊子曰、列子御風而行。泠然善、旬有五日而後反。司馬彪曰、泠然、涼貌也。郭象莊子注曰、天下莫不自是而相非。故一是一非。兩行無窮。唯涉空得中、曠然無懷。乘之以遊也。

鈔曰、排、推移之意。冥、道。筌、教也。言前張毅偏著外、单豹偏著内。玄度自言、我一時排推去。此二事合於道教、可以養生、可以全身。泠然、清虚貌。空中在二事之中得養其識。空中即道教備也。賞、神識也。既不偏即中於道。既中於道自然無累。

音決、筌、七全反。冥、亡丁反。泠、力丁反。

李周翰曰、冥、理。筌、迹也。泠然、輕举貌。循於環之四辺則終始無極。若処其環之空中則寂然不移。言理迹一時



排去而輕舉遊於環中、以為樂也。

李善曰く、筌は、魚を捕うるの器なり。言うところは魚の筌に在るは、猶お人の塵俗に処るがごとし。今既に排して之を去りて、超えて埃塵の外に在り。故に冷然として空を涉り、中を得て留まりて賞するなり。莊子に曰く、列子風を御して行く。冷然として善し。旬有五日にして後に反る、と。司馬彪曰く、冷然は、涼貌なり、と。郭像の莊子の注に曰く、天下に自らはとして相非とせざる莫し。故に一は是にして一は非なり。両つながら行れば窮まり無し。唯だ空を涉りて中を得れば、曠然として懐うこと無し。之に乗り以て遊ぶなりと、と。

鈔曰く、排は、推移の意なり。冥は、道なり。筌は、教なり。言うところは前の張毅の偏りて外を著し、單豹の偏りて内を著すなり。玄度自ら言う、我一時に排推して去る。此の二事の道の教えに合すれば、以て養生すべくして、以て身を全かるべし、と。冷然は、清虚の貌なり。空中は二事の中に在りて其の識を養うを得。空中は即ち道の教えの備わるなり。賞は、神識なり。既に偏らざれば即ち道に

中る。既に道に中れば自然にして累わづらう無し、と。  
音決に、筌は、七全の反。冥は、亡丁の反。冷は、力丁の反、と。

李周翰曰く、冥は、理なり。筌は、迹なり。冷然は、輕舉の貌なり。環の四辺に循れば則ち終始にして極まりなし。其の環の空中に処れば則ち寂然として移らざるが若し。言うところは理迹より一時に排去して輕舉して環中に遊び、以て樂を為すなり、と。

〔校勘〕

○李善曰 〔尤刻本・胡刻本・国子監本〕

〔善曰〕〔明州本・秀州本・建州本〕

○相人之处塵俗 〔猶人之处塵俗〕〔尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本〕

※今は「相」を誤りと見なして「猶」に従う。

○得中而留賞也 〔得中而留也〕〔尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本〕

○冷然善 〔冷然而善〕〔尤刻本・胡刻本・国子監本〕  
〔冷然善也〕〔建州本〕

○旬有五日 「旬」五日「明州本・建州本」

○而後反 「而」反「尤刻本・胡刻本・国子監本・秀州本」

○郭象 「郭象」〈尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本〉

○莊子注 「莊子註」〈建州本〉

○李周翰曰 「翰曰」〈陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〉

○泠然 「泠然」〈明州本〉

○無極 「无極」〈陳八郎本〉

○若処其環之空中 「若処其環」空中「陳八郎本・明州本・秀州本・建州本」

○以為樂也 「以為樂」〈建州本〉

「訳」

李善はいう、「筌は、魚を捕らえる道具である。魚が筌の中にいるのは、人が世俗の中で生きるようだ。（この句では）すでに筌を抜け出して、世俗の外にいるのだ。それゆえに涼しげに空を涉って、空中に留まって楽しんでゐるのだ。『莊

子』にいう、『列子は風を操って進む。涼しく心地よい。十五日経って帰ってくる』と。司馬彪はいう、『泠然とは、涼しげな様子である』と。郭象『莊子』に注している、『この世のものはみな自分自身は正しいものとし、相手のことは誤っているものとする。それゆえにあるものは是であり、あるものは非なのだ。両者は連関して、窮まるところは無い。ただ空を涉ってその両者のバランスのとれた中にいることができれば、のびのびとし何も思い悩まず事はない。それゆえに風に乗って遊ぶのだ』と。

『文選鈔』にいう、「排は、移りゆく意味であり、冥は、道の意味であり、筌は、その教えである。先の句に見た張毅が外面に偏っていたこと、単豹が内面に偏っていたことをいう。許詢自らいう、『私はしばらくの間世俗から移り去る。張毅と単豹の事例を道の教えに合わせれば、生を養う事ができ、身体を保ち続けることができる』と。泠然は、天の明るい様子である。空中は偏る二つ事例の中に存在し、そこにいれば見識を養う事ができる。空中とはすなわち道の教えが整っている場所である。賞とは精神と智慧のことである。既に偏った見識がないのであれば道に合すること

ができる。既に道に合しているならば無為自然の境地へと達して煩わしいものは無くなる」と。

『文選音決』にいう、「筌は、七全の反。冥は、亡丁の反。冷は、力丁の反」と。

李周翰はいう、「冥は、この世のことわりであり、筌は、事跡である。冷然は、脱俗の様子である。環の周りを巡っていても、そのまま始まりから終わりまできわまる事はない。その循環の中になれば静肅にしてもう移りゆくことがないようである。ことわりや事跡と言った世俗的なものから早く離れて、循環から脱することにより、その中で遊び、そして楽しむことができるのだ」と。

〔注〕

① 清虚 『文子』自然に「老子曰、清虚者天之明也（老子曰く、清虚は天の明るきことなり）」とある。

② 神識 精神と智慧。『晋書』謝安伝に「及総角、神識沈敏、風宇条暢、善行書（総角に及びて、神識は沈敏、風宇は条暢、行書を善くす）」とある。沈敏は落ちついていて聡明な様子。

③ 迹 事跡、物事のあと。例えば『莊子』天運篇で、老子が孔子に対し、「幸矣、子之不遇治世之君也。夫六経先王之陳迹也。豈其所以迹哉（幸いなるや、子の治世の君に遇わざるをや。夫れ六経は先王の陳迹なり。豈に其れ迹の所なるかな）」という。

④ 輕拳 世俗から脱すること。『晋書』卷六十八賀循伝に「或有遐棲高蹈、輕拳絶俗、逍遙養和、恬神自足（或いは遐棲して高蹈す、輕拳して俗を絶つ、逍遙して養和す、恬神にして自足する有り）」という記述があることから、單純に飛ぶことではなく、脱俗の意味合いを持つことが分かる。

⑤ 環中 是非の循環の内側。『莊子』齊物篇に「樞始得其環中、以応無窮（樞は始めて其の環中を得て、以て無窮に応ず）」とあるのに拠る。樞は、扉の回転のために設けられる軸のこと。

05 06 【遣此弱喪情 資神任独往】

李善曰、莊子<sup>①</sup>曰、予惡乎乎知悦生之非惑耶。予惡乎知惡死之非惑。非夫弱喪而不知歸者耶。敦<sup>②</sup>象曰、少失其故居

為弱と喪と者遂於彼之所在而不知歸於故郷。淮南王莊子略要曰、不知歸於故郷。淮南王莊子略要曰、江海之士、山谷之人也。輕天下、細万物而独往者也。司馬彪曰、独往任自然、不復顧世也。

鈔曰、資、養也。神、心也。独往、化。言身影不相干。反相因取形影俱亡。信任於變化、唯神独在。

音決、喪、息浪反。任、而禁反。

呂延濟曰、弱喪、謂少失其居而安於他方、不知歸故郷也。人之在生惡死亦同弱喪矣。資、採也。言遭此弱喪之情无不安。故採持其神、任之独往也。

陸善経曰、今俱排冥昧之筌跡。遣除弱喪則不懼於生死。任独往則所在皆安。

※……………部は全て〔見せ消ち〕

李善曰く、莊子に曰く、予悪くにか生の惑うに非ざるを悦ぶことを知らんや。予れ悪くにか死の惑うに非ざるを悪むを知らんや。夫の弱喪に非ずして帰る者を知らざらんや、と。郭象曰く、少くして其の故居を失いて弱喪と為る。弱

喪は彼の所に遂れて在りて故郷に帰るを知らず、と。淮南王の莊子略要に曰く、江海の士、山谷の人なり。天下を輕んじ、万物を細しとして独往する者なり、と。司馬彪曰く、独往は自然に任せ、復た世を顧みざるなりと、と。

鈔に曰く、資は、養うなり。神は、心なり。独往は、化なり。言うところは身影は相干さず。反し形影を取るに相因すれば俱に亡ぶ。變化に任するを信ずれば、唯だ神のみ独り在り、と。

音決に、喪は、息浪の反。任は、而禁の反、と。

呂延濟曰く、弱喪は、少くして其の居を失いて他方に安んじて、故郷に帰るを知らざるを謂うなり。人の生に在りて死を悪むも亦た弱喪に同じなり。資は、繰るなり。言うところは此の弱喪の情を遣れば不安なる所無し。故に其の神を操り持ちて、之に任せ独往するなり、と。

陸善経曰く、今俱に冥昧の筌・跡を排す。弱喪を遣除すれば則ち生死を懼れず。独往に任ずれば則ち在る所皆安からん、と。

〔校勘〕

○李善曰 〔尤刻本・胡刻本・国子監本〕

善曰 〔明州本・秀州本・建州本〕

○予惡乎乎 〔予惡乎〕 〔李善注各本なし。衍字とする〕

○生之非惑耶 〔生之非惑邪〕 〔国子監本・明州本・秀州本・建州本〕

○死之非惑

○死之非惑耶 〔尤刻本・胡刻本〕

〔死之非惑邪〕 〔国子監本・明州本・秀州本・建州本〕

○死之非惑邪 〔子之非惑邪〕 〔国子監本〕

○非夫弱喪 〔非弱喪〕 〔明州本・建州本〕

○不知婦者耶 〔不知婦者邪〕 〔国子監本・明州本・秀州本・建州本〕

○敦象 〔敦象〕 〔尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本〕

○弱と。喪と 〔弱喪〕のみ 〔尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本〕

○山谷之人也 〔山谷之人〕 〔尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本〕

・明州本。秀州本・建州本

○顧世也 〔顧世〕 〔尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本〕

○呂延濟曰 〔濟曰〕 〔陳八郎本・明州本〕

○人之在生惡死 〔人之好生惡死〕 〔明州本〕

○資、探也 〔資操也〕 〔陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〕

○遺此弱喪之情 〔遺此弱喪之情〕 〔明州本・建州本〕

○无所不安 〔無所不安〕 〔明州本・秀州本・建州本〕

○故探持其神 〔故操持其神〕 〔陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〕

※今は「探」字を誤りとして「操」に従う。

○任之独往也 〔任之独往〕 〔陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〕

〔訳〕

李善はいう、『莊子』にいう、『私がどうして生きること

を喜ばしいという考えに囚われようか。私がどうして死に

惑わないという考えに囚われようか。どうして私は若くして故居を失った者でなく再び故居に戻ろうとした人物を知らないだろうか』と。郭象はいう、『若くして故居を失い弱喪となる。弱喪と呼ばれる者は彼方に隱遁して故郷へ帰ろうとしない』と。淮南王劉晏の『莊子略要』にいう、『世を避ける人、世を否定する人である。独往は世俗を避ける人、世俗にいない人のことである。心に煩わしさがなく、小さなことに対しての迷いを無くして、自然に任せて世俗から逃れる』と。司馬彪はいう、『独往は自然に任せ、二度と世俗に戻ろうとしないことである』と。

『文選鈔』にいう、「資は、養うことである。神は、心である。独往は、変化することである。物体とその影はお互いに関係性を持たない。もし物体と影の両方を取って相接すれば、物体と影は両者とも滅ぶ。変化に任せれば、心だけが存在するのだ」と。

『文選音決』にいう、「喪は、息浪の反。任は、而禁の反」と。

呂延済はいう、「弱喪とは、若くして住まいを失い、他の所に安住し、故郷に戻ろうとしないことである。人が生き

るうちに死ぬことを憎むのは、弱喪と同じことである。資は操ることである。この弱喪の考えを追い払えば不安に思うことがなくなるのだ。だからその心を把握して、心に任せて脱俗するのである」と。

陸善経はいう、「今、稚拙な筈（世俗）と跡（事跡）の固定観念を押しつける。弱喪の考えを払えば生や死を懼れることはなくなる。独往の考えに任せれば、どんな所でも安住できよう」と

〔注〕

① 莊子曰く 『莊子』齊物論篇に該當箇所が見られる。艾がいの国の姫である麗姫が晋国に連れて行かれる際に泣き悲しんだが、晋国で食事をしたら泣いたのを悔やんだという故事に基づく。そこから死ぬことを悲しむことは知り得ないと述べている。

② 弱喪 若くして故居を失うこと。弱は若の意。

③ 江海之士 『莊子』刻意篇に「此江海之士、避世之人。間暇者之所好也（此れ江海の士、世を避くるの人なり。間暇なる者の好む所なり）」とある。

④山谷之人 『莊子』刻意篇に「此山谷之士、非世之人。枯槁赴淵者之所好也（此れ山谷の士、世を非とする人なり。枯槁して淵に赴く者の好む所なり）」とある。

⑤輕天下、細万物 『文子』九守に「老子曰、輕天下即神無累、細万物即心不惑（老子曰く、天下を輕んずれば即ち神に累無く、万物を細しとすれば即ち心に惑いあらず）」とある。

⑥相因 互いに関係しあうこと。相接すること。

⑦冥昧 幼稚。『爾雅』注に「幼稚者、冥昧也（幼稚は、冥昧なり）」とあるのに拠る。

⑧筌・跡 世俗と事跡。共に0304句の李周翰注に記されている。

## 07 08 【採菓白雲隈 聊以肆所養】

李善曰、隈、曲也。賈逵国語注曰、肆、恣也。

鈔曰、仙人採菓。即八珍<sup>①</sup>朱草<sup>②</sup>神丹<sup>③</sup>之属。是我今願之。雲隈山曲出雲也。聊、且也。肆、縦也。言自放縦也。

音決、隈、<sup>（見せ消ち）</sup>決、隈、烏回反。  
陸善経曰、肆、極也。所養、謂道真。

〔書き下し文〕

李善曰く、隈は、曲なり。賈逵の国語の注に曰く、肆は、恣<sup>ほしま</sup>なりと、と。

鈔に曰く、仙人菓を採る。即ち八珍・朱草・神丹の属なり。是れ我今之を願う。雲隈は、山曲より出づる雲なり。

聊は、且<sup>しばらく</sup>なり。肆は、縦<sup>ほしま</sup>なり。言うところは自ら放縦するなりと。

音決に、隈は、烏回の反、と。  
陸善経曰く、肆は、極なり。養う所は、道真を謂う、と。

〔校勘〕

○李善曰 〔 〕（尤刻本・胡刻本・国子監本）

〔 善曰 〕（明州本・秀州本・建州本）

○隈、曲也 〔 隈曲 〕（陳八郎本・明州本）

○国語注 〔 国語註 〕（建州本）

○肆恣也 「肆恣」(陳八郎本・明州本)

○良曰藥仙藥芝草屬也 この一文あり(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)

〔訳〕

李善はいう、「隈は湾曲のことである。賈逵の『国語』の注にいう、『肆は恣の意味である』と」と。

『文選鈔』にいう、「仙人は薬を採る。薬とは、すなわち八種の珍味、仙人になるための朱草や神丹といった類である。これらは私が今求めるものである。雲隈は山の湾曲したところに生ずる雲のことである。聊は且の意味である。肆は縦の意味である。みずから何にも縛られず思うままに振る舞うということである」と。

『文選音決』にいう、「隈は、烏回の反」と。

陸善経はいう、「肆は極めることである。養う所とは道の神髓のことである」と。

〔注〕

①八珍 八つの珍しい食べ物。『周礼』天官篇「膳夫」に

「凡王之饋食用六穀、膳用六牲、飲用六清、羞用百二十品、珍用八物、…(凡て王の饋食は食すに六穀を用い、膳六牲を用い、飲六清を用い、羞百二十品を用い、珍八物を用い、…)とあり、鄭玄注に「珍、謂淳熬、淳母、炮豚、炮牂、擣珍、漬、熬、肝膋也(珍は、淳熬、淳母、炮豚、炮牂、擣珍、漬、熬、肝膋を謂うなり)」とある。

②朱草 仙人になるための赤い草。『抱朴子』内篇・金丹篇に「又和以朱草一服之、能乘虚而行(又た和するに朱草を以て一たび之を服すれば、能く虚に乗りて雲に行く)」と記されている。さらに『抱朴子』は続けて朱草の特徴として「云朱草状似小棗。栽長三四尺、枝葉皆赤、莖如珊瑚、喜生名山岩石之下(云うところは朱草の状は小なる棗に似たり。栽の長きこと三四尺にして、枝葉は皆赤く、莖は珊瑚の如く、喜く名山の岩石の下に生ず)」と記している。また朱草の特徴に関して、『大戴礼記』にも「朱草日生一葉、至十五日以後、日落一葉、週而復始(朱草は日に一葉を生じ、十五日に至りて以後、日に一葉を落とし、週にして復た始まる)」とある。

③神丹 仙人になるための薬。『抱朴子』内篇・金丹篇



に「服神丹、令人寿無窮已（神丹を服せば、人をして寿の窮已を無からしむ）」とあるのに拠る。

④放縱 何にも縛られることなく振る舞うこと。

⑤極 あるがままに振る舞うために、目的を極めようとすること。『春秋左氏伝』昭公十二年の伝「昔穆王欲肆其心、周行天下、将皆必有車轍馬跡焉（昔穆王其の心を肆にせんと欲し、周く天下を行き、将に皆な必ず車轍・馬跡有らんとす）」の一文に付される杜預注に「肆、極也（肆は、極むなり）」とある。

### 09 10 【丹葩耀芳蕤 緑竹蔭閑敞】

李善曰、広雅曰、葩、花也。洞簫賦曰、又足樂乎其閑敞也。西征賦曰、厭紫極之閑敞也。

鈔曰、即仙人所採之葉朱草。葩、花也。蕤、花之心也。緑竹、と能長生不被葉落。故仙人多依此、欲自比其志操也。蔭閑敞、謂在高山空朗之处、皆生松竹高明也。閑、空也。敞、明也。蔭、覆也。

音決、葩、普花反。

劉良曰、閑敞、靜広貌也。

李善曰く、広雅に曰く、葩は、花なり、と。洞簫賦に曰く、又た其の閑敞を樂しむに足る、と。西征賦に曰く、紫極を厭い閑敞に之くと、と。

鈔に曰く、即ち仙人の採る所の葉は朱草なり。葩は、花なり。蕤は、花の心なり。緑竹は、竹の能く長生して葉の落つるを被らざるなり。故に仙人の多く此れに依りて、自ら其の志操に比せんと欲するなり。閑敞を蔭うは、高山空朗らかなる処に在りて、皆松竹の生じて高明なるを謂うなり。閑は、空なり。敞は、明なり。蔭は、覆なり、と。

音決に、葩は、普花の反、と。

劉良曰く、閑敞は、靜広の貌なり、と。

〔校勘〕

○李善曰 〔尤刻本・胡刻本・国子監本〕

〔善曰〕〔明州本・秀州本・建州本〕

○其閑敞也 〔其閑敞〕〔尤刻本・胡刻本・国子監本・明

州本・秀州本・建州本)

○**厭紫極** 「**厭紫極**」(国子監本・明州本・秀州本)

○**之閑敞也** 「**之閑敞**」(尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本)

○**菓仙菓芝草属也** 上の一文があるもの(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)

○**劉良曰** 「**良曰**」(陳八郎本・明州本・秀州本・建州本)

〔訳〕

李善はいう、『広雅』にいう、『葩とは、花である』と。

「洞簫賦」に言う、『その広々とした光景は十分に楽しいものだ』と。「西征賦」に言う、『宮中にうんざりして広大な場所へ行く』と。

『文選鈔』にいう、「すなわち仙人が採る菓とは朱草である。葩は、花のことである。蕤は、花の蕊のことである。

緑竹は、竹は長生きで葉っぱを枯らすことはないことをいう。それゆえに仙人の多くは竹をよりどころにして、自身の志や節操を丈の長さとは比べようとする。閑敞を蔭うとは、高い山の空の明るい場所には、どこにも松や竹が生い茂っ

ていることをいう。閑は、空である。敞は、明るいことである。蔭は、覆うことである」と。

『文選音決』にいう、「葩は、普花の反」と。

劉良はいう、「閑敞は、静かで広々とした様子である。」と。

〔注〕

①**洞簫賦** 王褒の賦。『文選』卷十七に収録されている。

「又足樂乎其閑敞」に対する李善注に、「敞、大貌。言竹生敞間の処に生じ、又た樂しむに足るなり」と記されている。

②**西征賦** 潘岳の賦。『文選』卷十に収録されている。『文選』の「西征賦」題下注に、「臧榮緒晋書曰、岳為長安令、作西征賦、述行歷、論所經人物山水也(臧榮緒の晋書に曰く、岳長安の令と為り、西征賦を作り、行歷を述べ、經る所の人物・山水を論ず)」と記されている。

③**紫極** 宮廷を指す。「西征賦」の「厭紫極之閑敞、甘微行以遊盤(紫極を厭い閑敞に之き、微行して以て遊盤に甘んず)」に対する李善注に、「紫極、星名。王者為宮以象之

(紫極は星の名なり。王は宮を為すに以て之を象る)とあるのに拠る。

④志操 志と節操。自身の信念を保つこと。

11  
12  
13  
14

【茗苕寄意勝 不覺凌虛上 曲櫺激鮮颺 石室有幽響】

李善曰、櫺、窓間子也。陸機吳趨行曰、冷と鮮風過。列

仙伝曰、赤松子常止西王母石室中。

鈔曰、茗と、高貌。寄、附也。勝者、道与世事戦勝也。

曲櫺、窓簷間也。激、清颺。清朝之風在窓簷間度、令人清

暢也。幽響と更遠也。吳都賦云、石室相拒、仙人所居処也。

音決、茗、音条。勝、尸証反。上、時掌反。櫺、力丁反。

颺、必遥反。

呂向曰、迢と、遠也。寄意、謂所寄至道之意。勝、謂勝

於俗情也。言至道既勝、不覺如乘空而上也。櫺、屋椽。激、

射也。鮮颺、鮮潔之風。石室、石穴也。幽響、山響也。

陸善経曰、意之所得無累為勝也。

李善曰く、櫺は、窓間の子なり。陸機の吳趨行に曰く、冷冷として鮮風過ぐと。列仙伝に曰く、赤松子は常に西王母の石室の中に止まると、と。

鈔に曰く、茗茗は、高き貌なり。寄は、附なり。勝とは、道の世事と戦いて勝つことなり。曲櫺は、窓簷の間なり。

激は、清颺なり。清朝の風は窓簷の間に在りて度り、人をして清暢ならしむるなり。幽響は響の更に遠なることなり。

吳都賦に云わく、石室相拒たるは、仙人の居る所の処なりと、と。

音決に、茗、音は条。勝は、尸証の反。上は、時掌の反。櫺は、力丁の反。颺は、必遥の反、と。

呂向曰く、迢とは、遠なり。意を寄すは、至道に寄る所の意を謂う。勝は、俗情に勝るを謂うなり。言うところは

至道既に勝れば、覺えずして空に乗りて上るが如きなり。櫺は、屋の椽なり。激は、射なり。鮮颺は鮮潔の風なり。

石室は石穴なり。幽響は、山響なり、と。

陸善経曰く、意の得る所は累い無く勝を為すことなり、と。

〔校勘〕

○李善曰 「尤刻本・胡刻本・国子監本」

「善曰」〈明州本・秀州本・建州本〉

○窓間子也 「櫺窓間孔也」〈尤刻本・胡刻本・国子監本・

陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〉

○冷と 「冷冷」〈建州本〉

○石室中 「石室中也」〈尤刻本・胡刻本・国子監本・明州

本・秀州本・建州本〉

○呂向曰 「向曰」〈陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〉

○迢と 「茗茗」〈陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〉

○山響也 「山響」〈陳八郎本〉

〔訳〕

李善はいう、「櫺とは、窓の格子のことである。陸機の「吳趨行」にいう、『ひようひよう』とさわやかな風が涼しく吹いている』と。『列仙伝』にいう、『赤松子は常に西王母の石室の中に留まっている』と」と。

『文選鈔』にいう、「茗茗は、高い様子である。寄は、近づぐことである。勝とは、道が乱れた世俗と戦って、道が

勝つことである。曲櫺は、窓の空間である。激は、急な強い風である。颯は、つむじ風ことである。朝の風は窓の間に入り、清らかにのびのびとさせる。幽響は、音が更に遠くに響くということである。「吳都賦」にいう、石室が隔たつてきている所は、仙人の住む場所である」と。

『文選音決』にいう、「茗、音は条。勝は、尸証の反。上は、時掌の反。櫺は、力丁の反。颯は、必遥の反」と。

呂向はいう、「迢迢は、世俗の情からは遠い様子である。意を寄すは、高い道の境地に近づくことを意味する。勝は、俗な考え方に勝つことである。自身の志がすでに俗の境地に勝つていれば、気付かぬうちに空に乗り、あがって行くようなことだ。櫺は、部屋の軒のきである。激は、風が強い勢いで吹くことである。鮮颯は、さっぱりとした様子である。石室は、仙人の居る洞窟である。幽響は、やまびこである」と。

陸善経はいう、「意味することは、煩うことなく世俗に打ち勝つということだ」と。

〔注〕

①曲櫺 窓に取り付ける装飾された格子。

②陸機吳趨行曰 引簡所は、陸機が吳の都にある昌門という高樓に入る風を「泠泠鮮風過（泠泠として鮮風過ぐ）」と詠じる場面である。『文選』卷二十八「吳趨行」の「泠泠」について、李善注は宋玉「風賦」を引用し「清泠泠」と注を記している。さらに『文選』卷十三「風賦」の「清泠泠」の簡所の李善注に「清涼之貌也（清涼の貌なり）」とある。

③列仙伝曰 、『列仙伝』「赤松子」では「赤松子、神農時雨師。服水玉以教神農。能入火自燒。往往至崑崙山上。常止西王母石室中（赤松子は、神農の時の雨師なり。水玉を服し以て神農に教う。能く火に入りて自ら焼く。往往にして崑崙山の上に至る。常に西王母の石室の中に止まる）」とある。

④世事 世俗。『文選』卷十五張衡「歸田賦」に「感蔡子之慷慨、從唐生以決疑 諒天道之微昧、追漁父以同嬉。超埃塵以遐逝、与世事乎長辭」（蔡子の慷慨に感じて、唐生に従いて以て疑いを決す。天道の微昧なるを諒らかにし、漁父を追いて以て嬉しみを同じくす。埃塵を超えて以て遐く

逝き、世事と長く辞せん）」とあり、引用部分の李善注に、「世務紛濁。以喻塵埃。莊子曰、遊乎塵埃之外（世務は紛濁す。以て塵埃に喩ゆ。莊子に曰く、塵埃の外に遊ぶ）」とある。

⑤窓簷 簷は軒に通じ、軒には長廊下の窓の意味がある。『文選』卷二十四曹植「贈徐幹」に、魏の地にある文昌殿において、「春鳩鳴飛棟、流焱激樞軒（春の鳩は飛棟に鳴き、流るる焱は樞軒に激し）」と詠ずる場面があり、その李善注に「軒、長廊之有窓也（軒は、長廊の窓有るなり）」とある。

⑥激、清颯 激と清の關係は、『楚辭』「招魂」の王逸注に「激、清声也（激は、清声なり）」とあるのに拠る。

⑦吳都賦曰 左思の賦。『文選鈔』の引用簡所は『文選』卷五「吳都賦」からそのまま引用している訳ではなく、「吳都賦」本文に「增岡重阻、列真之宇。玉堂对霽、石室相距。（増る岡の重なり阻しく、列真の宇あり。玉堂霽を対えて、石室相距たる）」とあり、その李善注に「石室、仙人居也（石室は、仙人の居るなり）」とある。『文選鈔』本文は兩者を合わせたものである。

⑧至道 道の極地。『荀子』儒效篇に「以從俗為善、以貨

財為宝、以養生為己至道、是民徳也（俗に従うを以て善を為し、貨財を以て宝を為し、養生を以て己の至道を為すは、是れ民の徳なり）」とあり、この箇所の楊倞注に「養生為己至道。謂莊生之徒。民徳言不知礼義也（養生は己の至道を為す。莊生の徒を謂う。民徳は礼義を知らざるを言うなり）」とあるのに拠る。

⑨鮮潔 白く清らかなるさま。班婕妤「怨詩」に「新裂齊紈素、鮮潔如霜雪（新たに齊の紈素を裂けば、鮮潔霜雪の如し）」とあるのに拠る。

15 16 【去矣従所欲 得失非外奨】

李善曰、陸機招隱詩曰、税駕従所欲。李蕭遠運命論曰、得与失孰賢。謝靈運擬鄴中詩曰、客心非外奨。小雅曰、奨勸也。

鈔曰、言処（つゝ）所既如此我願隱去従我願欲也。得即隱士。矣、即世事牽心既忘。得失、不為外所。奨勸。使迷於世俗中也。音決、奨、子両反。

張銑曰、言去従所欲之至道。得失、由心。非外物所能奨勸也。

陸善経曰、言得失俱忘、非仮外奨。

李善曰く、陸機の招隱詩に曰く、駕を税（と）きて欲する所に従わん、と。李蕭遠の運命論に曰く、得と失とは孰れか賢なる、と。謝靈運の擬鄴中詩に曰く、客心は外奨に非ず、と。小雅に曰く、奨は勸むるなりと、と。

鈔に曰く、言うところは既に此の如く我の隠れ去らんと願うところに従う処所なり。即ち隱士となるを得るなり。矣は、即ち世事の心を牽くこと既に忘る。得失は、外所に為さず。奨は、勸むるなり。世俗の中より迷わしむるなり、と。

音決に、奨は、子両の反、と。

張銑曰く、言うところは去は欲する所に従い至道に之く。得失は、心に由る。外物の能く奨勸する所に非ざるなり、と。

陸善経曰く、言うところは得失俱に忘るるは、外の勸めを仮（か）るに非ず、と。

〔校勘〕

○李善曰 〔尤刻本・胡刻本・国子監本〕

〔善曰〕〔明州本・秀州本・建州本〕

○張銑曰 〔銑曰〕〔陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〕

○奨勸也 〔奨勸〕〔陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〕

〔訳〕

李善はいう、「陸機の「招隱詩」は言う、『世俗での活動を休んで、自分の望むことにむかっていこう』と。李蕭遠の「運命論」に言う、『得と失はどちらが賢いか』と。謝靈運の「擬鄴中詩」に言う、『私の心は景物には求められない』と。『小雅』にいう、『奨は勧めることである』と」と。

『文選鈔』にいう、「目的は既にこのように、自身を隠したいと思う心に従うことである。自分の心に従うということとはつまり仙人になることである。矣は、世俗に対する未練を既に忘れ去ったことを意味する。得ることや失うことは、世俗を脱したところには生じない。奨は、勧めることである。俗世の中で人を惑わせることである」と。

『文選音決』にいう、「奨は、子両の反」と。

張銑はいう、「去は自分の望むことにのっとって、道の境地に行くことである。得ることと失うことは心に拠るものであり、世俗からの誘惑によるものではない」と。

陸善経はいう、「得ることも失うことも共に忘れるには、世俗からの誘惑を非とするべきである」と。

〔注〕

①陸機招隱詩曰 『文選』卷二十二陸機「招隱詩」の最後の二句に陸機自身の「富貴苟難図、税駕従所欲（富貴は苟に図り難し、駕を税きて欲する所に従わん）」と隱遁への憧憬が詠じられている。

②李蕭遠運命論曰 魏の李康が記した「運命論」は『文選』卷五十三に収録されており、この世の「命」による支配について述べている文章である。ただし李善注の引用箇所は、得と失の二元論を述べている文章としての引用であるため、「運命論」は当該詩の解釈と直接的な関係はない。

③謝靈運擬鄴中詩 謝靈運が王粲を擬して作った詩。旅行のさなか、「沮漳自可美、客心非外奨（沮と漳は自ら美と

すべきも、客心は外獎にあらず」と、荊州の美しい景色を見て、旅人である私の心の憂いは拭えないと述べる。

④ 隠士 仙人のこと。左思「招隱詩」に「杖策招隱士、荒塗横古今。巖穴無結構、丘中有鳴琴（策を杖いて隠士を招かんとす、荒塗に古今横たわる。巖穴に結構無くも、丘中に鳴琴有り）」と、隠士を訪ねるために巖穴へと行く場面がある。巖穴は石室のことであり、そこに留まるのは仙人である。

⑤ 得失 世俗における得ることと失うこと。用例として陶淵明「祭従弟敬遠文」で陶淵明がいとこの死を悼み「心遺得失。情不依世（心は得失を遺れ、情は世に依らず）」と述懐する場面がある。

⑥ 外物 道に到達するために世俗から離れること。『莊子』大宗師篇に、女偶から道を学び続けた卜梁倚が「参日而後能外天下（参日而る後、能く天下を外る）」と天下から離れて、さらに「七日而後能外物（七日而る後能く物を外る）」と肉体から脱する場面がある。道を学ぶ事によって世俗から抜け出すことができる。

17 18 【至哉操斤客 重明固已朗】

李善曰、莊子曰、莊子送葬、過恵子の墓。顧謂従者曰、郢人聖壘其鼻端若蠅翼。使匠石斲之。匠石運斤成風、聽而斲之。尽聖而鼻不傷。郢人立不失容。宋元君聞之、召匠石曰、嘗試為寡人為之。匠石曰、臣則嘗能斲之。雖然臣質死久矣。自夫子之死、吾无以爲質矣。吾无与言也。

音決、操、七刀反。重、逐竜反。

李周翰曰、至、極也。極哉、歎之也。有聖人汚漫其鼻、匠石操斤斲之。汚尽而不傷、是二人相明。故曰重明。固、謂固如是。朗、明也。

陸善経曰、郢人為質。重明、發暉。固已、清朗。

李善曰く、莊子に曰く、莊子葬を送り、恵子の墓に過る。顧みて従者に謂いて曰く、郢人の聖もて其の鼻端に壘ること蠅の翼の若し。匠石をして之を斲らしむ。匠石は斤を運らせ風を成し、聴せて之を斲る。聖を尽くせども鼻は傷つかず。郢人立ちて容を失わず。宋元君之を聞き、匠石を召して曰く、嘗試に寡人の為に之を為せと。匠石曰く、臣則



ち嘗て能く之を斲る。然りと雖ども臣の質は死して久し、と。夫子の死より、吾以て質と為すは無し。吾与に言う無きなりと、と。

音決に、操は、七刀の反。重は、逐竜の反、と。

李周翰曰く、至は、極なり。極哉は、之を歎ずるなり。

聖人は其の鼻を汚漫し、匠石は斤を操りて之を斲る有り。汚れの尽せども傷つかざるは、是れ二人相い明るければなり。故に重明と曰う。固は、固より是の如きを謂う。朗は、明らかなり、と。

陸善経曰く、郢人は質と為る。重明は、発暉なり。固よりは、清朗なり、と。

〔校勘〕

○李善曰 〔 〕 〈尤刻本・胡刻本・国子監本〉

〔善曰〕 〈明州本・秀州本・建州本〉

○墮 〔漫〕 〈尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本〉

○匠石斲之 〔 〕 〈尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本〉

○吾无以為質矣 「吾無以為質矣」 〈尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本〉

○吾无与言也 「吾無与言也」 〈尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本〉

○李周翰曰 〔 〕 翰曰 〈陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〉

○汚尽而不傷 「汚尽而不傷鼻」 〈陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〉

〔訳〕

李善はいう、『莊子』にいう、『莊子は野辺送りをし終えて、恵子の墓に立ち寄った。振り返って従者たちに向かつていう、『郢人は、しつこいを自分の鼻の端に蠅の羽ほどの僅かに塗った。匠石にこれを切らせた。匠石は斧を風を生むように自在に操りそのしつこいを削った。削り終えても鼻に傷がつくことなく、郢人は微動だにしなかった。宋の元君はこのことを聞いて、匠石を召して、『試しに私のために例の技をしてみよ』と言った。匠石は、『私はかつてしつこいを削る技ができました。そうではありませんが、私のし

つくいの土台のように頼れるよりどころである郢人がとうの前に亡くなってしまったのです』と。恵子が死んでしまつてからは、私も郢人のようなよりどころがいなくなつてしまつた。私は話し合うこともなくなつてしまつた』と。

『文選音決』にいう、「操は、七刀の反。重は、逐竜の反」と。

李周翰はいう、「至は、極めて甚だしいことである。極哉とは、この甚だしさに感心しているのである。聖人は自身の鼻を汚し、匠石は斤を操つてしつこいを削る。しつこいが削られて無くなつても、鼻に傷がつかなくつたのは、二人がお互いに知り尽くしていたからである。だから重明と云うのだ。固は、まことにこのようであると云う。朗は、明らかなことである」と。

陸善経はいう、「郢人はよりどころとなつた。重明は、輝きを発散することである。固に已には、清く明らかな様子である」と。

〔注〕

① 莊子曰、莊子送葬、李善注は『莊子』除无鬼篇から引用である。心底理解し合う友を失うことの虚無を記している。なお『世説新語』傷逝篇では、東晋の支遁が友である法度を失つた際に、「昔匠石斲斤於郢人、牙生輟絃於鍾子（昔匠石は斤を郢人に斲し、牙生は絃を鍾子に輟む）」と、当該の内容と「知音」の故事で知られる伯牙と鍾子期の關係が並列されている場面があり、言葉を発さずとも理解し合える仲として取り上げている。

② 極 甚だしいこと『易』坤卦に「至哉坤元、万物資生（至れるかな坤元、万物資りて生ず）」とあり、その注に「至、極也（至は、極なり）」とあるのに拠る。

③ 汚漫 「漫」は「墁」の仮借。「墁」は塗る事であり、塗つて汚くするといった意味。

④ 重明 王先謙『荀子集解』到士篇に「重明」の語があり、その注に「既明、又使明也（既に明なるを、又た明せしむ）」と記されている。

⑤ 質 『莊子集解』成玄英の疏に「質、対也。匠石雖巧、必須不動之質（質は、対なり。匠石巧と雖も、必ず不動の質を須る）」とある。技巧をこなすのに不可欠な存在として、

よりどころと訳した。

⑥清朗 清く澄んでいる様子。『世説新語』言語篇に「非唯使人情開滌。亦覺日月清朗（唯だ人をして情を開き滌がしむるのみに非ず。亦た日月の清朗なるを覺ゆ）」とあり、空の澄んでいる様子を詠ずる際に使用されるのに拠る。

19 20 【五難既灑落 超迹絶塵綱】

李善曰、向秀難嵇康養生論曰、養生有五難。名利不滅、此一難也。喜怒不除、此二難也。声色不去、此三難也。滋味不絶、此四難也。神慮精散、此五難也。滋

鈔曰、灑、散也。超迹、遠去也。言超越其跡、絶去世事塵綱也。

音決、難、那旦反。灑、所買反。

呂延濟曰、塵綱、喻代事也。言脱落五難、超然絶代事也。陸善経曰、灑落、揮灑而散落也。

李善曰く、向秀の難嵇康養生論に曰く、養生に五難有り。

名利滅びず、此れ一難なり。喜怒除かず、此れ二難なり。声色去らず、此れ三難なり。滋味絶えず、此れ四難なり。神慮精散す、此れ五難なりと、と。  
鈔に曰く、灑は、散なり。超迹は、遠くに去るなり。言うところは其の跡を超越するは、世事の塵綱を絶去せんとするなり、と。

音決に、難は、那旦の反。灑は、所買の反、と。  
呂延濟曰く、塵綱は、代事に喩うるなり。言うところは五難を脱落するは、超然として代事を絶たんとするなり、と。

陸善経曰く、灑落は、揮灑して散落することなり、と。

〔校勘〕

○李善曰 〔尤刻本・胡刻本・国子監本〕

〔善曰〕〔明州本・秀州本・建州本〕

○名利不滅 〔名利不滅〕〔尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本〕

○一難也 〔一難〕〔尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本〕

○二難也 「二難」 〈尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本

・秀州本・建州本〉

○三難也 「三難」 〈尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本

・秀州本・建州本〉

○四難也 「四難」 〈尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本

・秀州本・建州本〉

○精散 「消散」 〈尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本・秀州本・建州本〉

○五難也 「五難」 〈尤刻本・胡刻本・国子監本・明州本

・秀州本・建州本〉

○呂延濟曰 「 濟曰」 〈陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〉

○「養生有五難。一曰喜怒。二曰声色。三曰滋味。四曰神

浮。五曰消散。」 呂延濟注に上記の文章が存在するもの 〈陳

八郎本・明州本・秀州本・建州本〉

○代事 「世事」 〈陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〉

○超然 「超」 〈陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〉

○絶 「絶去」 〈陳八郎本・明州本・秀州本・建州本〉

「訳」

李善はいう、「向秀の『難嵇康養生論』にいう、『生を養う中で五つの難点がある。名誉と利益が減らないこと、これが一つ目の難点。正常な感情ではない喜びと怒りが取り除かれないこと、これが二つ目の難点。音楽と色好みから逃れられないこと、これが三つ目の難点。美味を求め続けること、これが四つ目の難点。そして精神が散漫になること、これら五つの難点である』と」と。

『文選鈔』にいう、「灑は、散ずることである。超跡は、世俗から遠くへ離れることである。この世俗を超えるとは、この世のしがらみを拒絶し離れることである」と。

『文選音決』にいう「難は、那且の反。灑は、所買の反」と。

呂延濟はいう、「塵網は、世俗の喩えである。この句は、仙人になるのを妨げる五つの欲心を振りはらって、外部の影響を受けず世俗との関わりを断つことである」と。

陸善経はいう、「灑落は、綺麗に振り払って落とすことである」と。

〔注〕

① 向秀難嵇康養生論 向秀による嵇康「養生論」を批評した文章。逸文。嵇康はさらにその文章に対し「答向子期難養生論」で反論した。『文選集注』の引用箇所は「答向子期難養生論」からの引用と考える事ができる。

② 養生 生を養うとは、道に近づく事であり、言いかえれば仙人になることである。嵇康「養生論」では仙人の存在を認め、弛まぬ努力を続ける事により仙人に近けることを説く。

③ 喜怒 嵇康の「養生論」の中で養生を成し遂げられない事例として「喜怒悖其正気（喜怒は其の正気を悖す）」とある。

④ 声色 好色。嵇康の「養生論」の中で「声色是耽（声色是れ耽る）」とある。

⑤ 滋味 美味。嵇康の「養生論」の中で「滋味煎其府臟（滋味其の府臟を煎る）」とある。

⑥ 塵網 世俗のしがらみ。例えば陶淵明「帰園田居」其一に「少無適俗韻、性本愛丘山。誤落塵網中、一去十三年（少くして俗に適うの韻無く、性本より丘山を愛す。誤り

て塵網の中に落ち、一たび去ること十三年）」とあり、世俗の束縛を表現している。

⑦ 代事 世事。「世」は唐太宗李世民的諱であるため、「代」を使用したものである。

（筑波大学大学院人文社会科学研究所博士課程）

『文選集注』江淹「雜体詩」

（二〇一四―一五年度）演習参加者（五十音順）

荒井 禮 （あらい・れい）

荒川 悠 （あらかわ・ゆう）許詢担当

宇賀神 秀一 （うがじん・しゅういち）

小田 健太 （おだ・けんた）

王 連旺 （おう・れんおう）

加藤 文彬 （かとう・ふみあき）

重野 宏一 （しげの・ひろかず）